

〈研究ノート〉

ヨーロッパ中世の鐘と「共同体」

——ハーヴェルカンプ教授の近業を中心に——

目次

- 一、まえがき
- 二、「共同体」の分布範囲
- 三、鐘の沿革と分布
- 四、小括——鐘と祭祀共同体

一

この小文は、論集の共通テーマ「近代化の思想的系譜」に直接答えるものではない。そのためには、まずヨーロッパ中世の「共同体」が近代社会ないし近代化の進行する過程でいかなる意味を持ったかをきちんと論証するところから始めなければならないであろう。

近代社会の形成については、近代的・合理的個人の折出という視点から前近代の「共同体」のもつネガティブな側面を強調し、ヨーロッパ

魚 住 昌 良

パの「近代」と「中世」を峻別する論者も少なくない。ヨーロッパ中世に関して——ギリシア・ローマの古典期や近代と異なり——公共の領域 *Öffentlichkeit* と私的領域 *Privatsphäre* の対峙を認めず、中世で重きをなしたのは、領主の公的体面 *Öffentliche Repräsentation von Herrschaft* だけであったとする J・ハバマス<sup>(1)</sup>なども、さしずめその一人であろう。彼は、公共の領域とされるものは、十八世紀以降、商品の流通と社会的労働の形成につれて個有の法則に従って構築される *bürgerliche Gesellschaft* に個有のものと考え、かかる「市民的公共性」*bürgerliche Öffentlichkeit* の系譜を——中世の「共同体」などにはまったく立ち入ることなく——十三世紀以降の北イタリア諸都市における金融・商業資本主義に遡って追及するもの<sup>(2)</sup>である。

このような研究視覚からは、横の繋がりを原理とするゲノッセン

シャフトリヒな「共同体」のもつ民主的側面はまったく考察の外におかれることとなり、ヨーロッパ中世都市の形成に関して領主制的原理と共同体的原理の結合ないし絡みあいに関心を持ってきた筆者の立場<sup>(3)</sup>からも、一応の疑義と留保を提出しておかなければならない。中世後期から近世にいたる近代国家形成過程における領邦「支配権力」の上からの近代化と都市民や農民の「共同体」を中心とする下からのそれを対置させて考察するP・ブリックレの諸論稿も大きな示唆を提供している。<sup>(4)</sup>

この小稿では、如上の背景を承知しつつ、表題に掲げた「鐘」が「共同体」にどのようなかわつたかという点に注目したい。昨一九九五年、A・ハーヴェルカンブ教授がヨーロッパ中世の「共同体」と「鐘」の分布についての興味深い符合関係を指摘する二つの論稿を発表した。本稿は、その内容の一端を整理紹介することを通じて、今後の研究——日本の諸事情との比較考察をも含む——を進めるための手掛りとするに留めたいと思う。<sup>(5)</sup>

「鐘」と中世の「共同体」との関連について日本史研究の分野では、すでに一九八〇年代の初頭から大きな注目が拂われている。逃散を目的とする「一味神水」に際して鳴らされる鐘に言及した入間宣夫論文、一揆成立の要件として「一味神水」にあたって鐘、鉦などを打ち鳴らし、あるいは、金属器具を打ち鳴らすことを神水と併用して誓約の固めとした、と述べる峰岸純夫氏の論稿などがそれである。<sup>(6)</sup> 近時の日本

史側の音への着目は、一揆の契約としての鐘の音が出発点となっている、<sup>(7)</sup> と言ってよいようである。

ヨーロッパ史の分野では、阿部謹也氏が『中世の星の下で』<sup>(8)</sup>などで、鐘の音が階層を越えた共同体全体の絆となったことに言及して先駆的な問題提起をおこなっているものの、このテーマが多数の論者を擁する研究課題となるにはいたっていない。ヨーロッパ自身の研究のなかでは、阿部氏も前掲書で紹介しているP・ザルトリ、E・リッパートなどが早くから鐘に関するすぐれた労作を公刊しているが、<sup>(9)</sup> 「鐘と共同体」に焦点を絞ってみると、テーマそのものがそれほど注目されているとは言えない現状である。他の点では内容豊富な都市史の標準的諸文献<sup>(10)</sup>においても、鐘については、僅かに言及されることはあっても詳述するものは皆無、逆に鐘に関する大量の出版物も「共同体」との関連を真正面から扱ったものはほとんどない模様である。ハーヴェルカンブ自身、このような学界状況を意識しつつ、前述の二論稿の基となった九五年七月開催のコロキウム報告に「鐘なくして共同体なし——中世ヨーロッパにおけるコミュニケーションの組織形態」という刺激的な副題を付して聴集の注意を喚起したのであった。<sup>(11)</sup>

以下、専らハーヴェルカンブ論文に依りながら、ヨーロッパ中世の鐘の分布と共同体との関係をたどっておきたい。

「鐘」そのものの沿革や分布に入るまえに、まずヨーロッパ中世にお

ける「共同体」の存在範囲を確認しておく必要がある。そのためには、ここでいう「共同体」とは何を指すのかという定義にも触れておかなければならぬであろう。ハーヴェルkampは、さし当たりM・ヴェーバーの都市ないし都市共同体理解に基づきながら、若干の微調整を加えて自説を展開している。<sup>(12)</sup> 古代から中世にかけて広範に拡がった都市的定住地のなかで——オリエントにおける僅かな例外ないし萌芽は別として——都市共同体のかたちをとったのは西洋の諸都市のみであったとするヴェーバーは、さらに中世に関して、その成員の宣誓盟約と共通の法を基盤に政治的に有効な自立性(AutonomieとAutokephalie)を発達させた共同社会のみを「共同体」と定義した。<sup>(13)</sup>

ヴェーバーのこの定義を基準とするならば、ヨーロッパ中世の都市と——ヴェーバーはほとんど考慮に入れていないが——農村の「共同体」は主としてラテンの西方にのみ検証される、とハーヴェルkampは考える。<sup>(14)</sup> ここで考えられているのは、ローマカトリック教会の影響下にある幾つかの文化領域、すなわち今日の西欧と中欧の広い諸地域および、とくに中世後期については、地中海の東部をも含む諸地域である。逆に「共同体」の存在が認められないのは、回教徒の支配領域であり、そのことは、例えばイベリア半島のような西ヨーロッパにおいても妥当する、と。<sup>(15)</sup>

なお、近年ライン・マース流域地方について中世のユダヤ人に関係する大規模なプロジェクトを組織して総合的な研究を開始しているハーヴェルkamp教授は、ヴェーバーも見落としている事実として、

中世を決定づける社会形態たる「共同体」が、ヨーロッパ内陸や地中海地域のユダヤ人社会にあっても、少なくともラテンの西方のキリスト教徒定住地におけるのと同じ位早くから存在していたことを指摘して大方の注意を喚起している。<sup>(16)</sup>

同じように眼につくのは、これもまたヴェーバーが考慮に入っていないことであるが、ギリシア正教によって刻印づけられた諸文化圏——東ローマ・ビザンツ帝国や古ロシア、スラヴの諸地域でも「共同体」が発展していないということである。例外とされたのは、西方の持続的影響を受けたところ、例えばロシアの古都ノヴゴロドなどであった。この都市は、何世紀にもわたってヴァラング人(九世紀にロシアに入ってルーリック朝をたてたノルマン人)やスウェーデン人の影響を受け、かつハンザ同盟と密接に結びついていた。<sup>(17)</sup>

ヴェーバーが西欧中世都市の本質的基礎として強調したのは、原始キリスト教会にあった友愛(Bruderlichkeit 兄弟のような親密さ)の原則であった。この原則は、事実、その友愛と結びついた女性の価値の基本的引き上げを伴っていた。「共同体」の実現にとって、奴隷身分の廃止が不可欠ということではなかったとしても、ある種の倫理的転換を伴うものであったのである。もともとユダヤ人の「共同体」の存在は、この友愛の原則を原始キリスト教の教会 ecclesia のなかで基礎づけられ典礼のかたちで定められた聖餐共同体からのみ導きだすことに疑問を狭ませるであろう。むしろユダヤ人とキリスト教徒の間の共通点がこの点で注目されるべきである、とハーヴェルkamp氏は述べている。<sup>(18)</sup>

氏は、W・ブルケルトを引用しながら、*ekklesia* がもともととは古典ギリシアのポリス体制に由来する「市民集会」の意味であって、ユダヤ教のセプトウアギンタ (*Sepтуаginta* いわゆる七十人訳ギリシヤ語聖書) を通してキリスト教に入ってきたこと、そして「異教の宗教にはこれに相当するものがない」という事実がこのことを暗示する、と説明している。<sup>(19)</sup>

「共同体」に関するキリスト教世界の西部と東部の明白な相異は、経済的・社会的諸条件はとりあえず措くとすれば、支配の諸条件の大きな違いから説明できるであろう。すでに古典古代後期から、かつての西ローマ帝国の諸領域すなわち後のローマ・ラテンの宣教諸地域と他方東ローマ・ビザンツ帝国ならびに古ロシア系諸地域との間に支配のあり方にさまざまな相異が生じていた。後者すなわち東部の諸地域では、支配組織がさまざまな理由——その一部は後期古典ローマの伝統に根ざしていた——から、極めて安定したものとは言えないまでも、全体としてより強固に集権化されていたのである。<sup>(20)</sup>

ところでヴェーバーが強調した同朋愛の意義が宗教的根源を持つものであることから、東西両教会の宗教上、祭祀上の相違を避けて通ることはできないであろう。西方教会と東方正教会の間にはさまざまな相異があったが、聖徒の遺骨、記念物などを含む聖遺物<sup>レリキエン</sup>の、従って聖人崇拜<sup>ハイリゲンクト</sup>のあり方の違いもその一つであった。古典古代後期の間に、国家宗教化しつつあったローマ・ラテンの西方のキリスト教界内部では、聖遺物や従って聖人崇拜が有力なローマ人家族の処分権に

委ねられず、地域司教<sup>エписコピ</sup>の指揮の下に「公の財産」<sup>パブリーカ</sup>と宣言されて「万人の手のとどくもの」となるという展開が決定的となった。P・ブラウンの定式化を借りれば、聖遺物ないし聖人崇拜が「共同体社会の全員に共有される特有の祭式形態の中心点」となったのである。<sup>(21)</sup>

同じこと、すなわち紀元四、五世紀以降、西方キリスト教世界の「キヴィタス」*civitas* 内部に、とりわけでもその周辺地域に、建築物のうえでも地誌的な観点からも、その多くが新しい種類の、あるいは新しい方向づけをさえ含む中世都市の基本的骨組みとなるような宗教的景観が形成されてくる。<sup>(22)</sup> 例えば古典古代後期から中期にかけてのトリアーが格好の事例となる。初期中世トリアーの地誌についてはいずれ稿を改めて考察したいと考えているので、ここではごく簡単な一瞥に留めておきたい。<sup>(23)</sup>

四世紀のコンスタンティヌス帝の大聖堂は、一世紀以来直交する計画的道路網で整然と区画されてきた都市定住地の北の端に寄った辺りに建立された。その他の新しい祭祀の中心地が市外地の南方と北方、古代の市壁の外側の墓地の上に、それぞれ四ないし五世紀以降、初期の司教たちの墓所に建つ教会堂の周辺に形成されてくる。初期中世が進むなかで、これらの地域で、北方ではベネディクト派の修道院<sup>クロスツキヤフ</sup>聖マクシミンや聖パウリン修道院<sup>シュテファ</sup>が、南方では同じくベネディクト派の聖オイハリウス修道院が発生した。さらに女子修道院聖イルミーンがモーゼル河岸に近い、それでもまだローマ都市壁の内部にあった穀物倉庫の廃墟のなかに発生している。このようにして、古代ローマ都市

の周縁部ないし市壁外部に、来たるべき中世の前兆のような宗教的景觀が形成されてくることに留意しておきたいと思う。<sup>(24)</sup>

ところで当時のラテンの西方においては、司教座聖堂都市の司教たちの世俗的権力も、如上のような地域に中心をおき共同体的指向を伴う聖人崇拜に依拠するところがあった。しばしばなかば絶対的なもののように誤解されている司教たちの地位は、都市の宗教的・防衛的共同社会とさまざまな面で密接に結びつき、共同社会と一体化していたのである。それに反して東ローマ・ビザンツの支配組織のなかの司教たちは、西側のそれと比肩し得る地位を占めることなく、極端な危機の時期を除いては、各地の都市的中心部分で独自の政治的指導力をふるうこともなかった。ビザンツ正教会に属する東部では、西方で発生した小教区に匹敵し得るような地方教会組織もほとんど発達しなかった。その教区共同体が、他ならぬラテンの西方において、政治的に行動する「共同体」の重要な基盤となり同時にその組織形態となったのである。<sup>(25)</sup>

このように考察してみると、次のようなテーゼ、すなわち西方キリスト教界の聖遺物崇拜における具体的な聖人の存在がそれぞれの教会の独立性を助長する方向で働いたとするテーゼは是認できるように思われる。それぞれの教会の実際の神は<sup>ヘル</sup>それぞれの聖人、すなわち守護聖人であり、その守護聖人がそれぞれの教会に所属する祭祀<sup>クルム・マイン・シヤフト</sup>共同体の原理的独立性を端的に保証するものとなる。聖遺物崇拜が——ハーヴェルカンブ氏によれば——従ってヨーロッパ西方では、共同体形成

に向かう展開にとって、絶対に不可欠とは言わないまでも、一つの重要な土台となったのである。<sup>(26)</sup>

いずれにしても、ここで確認されることは、キリスト教世界内部において次第に重みを加えてゆくことになる東西の差異が、宗教的・教會的次元で早くも古典古代後期——P・ブラウンが専らラテンの西方の聖遺物・聖人信仰との関連で一つの「宗教革命」を確認した時期——以来形成されてきたという認識であろう。「共同体」の拡がりに関する如上の考察を踏まえて、次に「鐘」の沿革と分布にかかわる最近の研究状況を紹介しておきたいと思う。<sup>(27)</sup>

### 三

「鐘」に関する最古の証明は、紀元前の中国の考古学的遺物に遡るとされるが、その場合も、またその他のさまざまな古代の宗教、文化圏の場合でも話題となるのは、主として非常に小さい鐘であり、従ってそれ相應に聴取距離も小さなものであった。<sup>(28)</sup>これらの鐘には、通常、早くからお祓いの力、すなわち疾患や悪霊を防ぐ力があるものとされていた。このようにもとは異教のものであった鐘が——最初は躊躇いながらではあったが——五世紀ごろからキリスト教の祭祀のなかで使用されるようになる。しかもこの場合は、まず第一に、教會の共同社会ないし教区のための連絡・伝達器具としてであった。このことが恐らく最も徹底して起こったのはアイルランドの修道院においてであった。アイルランドの修道院は、一部では、特徴的な

ことであるが、司教区の役割を引き受けており、それゆえにさまざまな連絡・伝達を必要とする度合が大きかった。<sup>(30)</sup>六世紀の最後の四半世紀のころになると、どうやら大陸の司教座聖堂などで鐘が普通になっていた。トゥールの司祭グレゴール(五七三―九四)の著作が最もよい証言を提供している。<sup>(31)</sup>

西方キリスト教世界のほとんどの地方では、初期中世の流れのなかで鐘が急速に拡がっており、九世紀には、ほとんどすべての修道院や教会、とくに教区教会で鐘の存在を仮定してもよいようである。ベルクキルヘンのような小さな集落の教会がすでに八四二年以前に青銅の鐘と鉄の鐘を使用しており、その四十年後には、ある貴族が下バイエルンのブーバツハの所領から、彼の教会とともに、三つの鐘をレーゲンスブルクの聖エメラム修道院に譲渡したことが確認されている。<sup>(32)</sup>

北ヨーロッパ地方のこの時代のこの種の合図用の器具が多くの場合まだ小さく、技術的にも十一、二世紀の水準には遠く及ばないものであったことは、当時重要な商業集落であったハイタブから出た恐らく九世紀鑄造の鐘が示している。近年の幸運な発掘のおかげで比較的確な知見を得ることが可能となったこの鐘は、重量約二五キロ、高さ〇・五メートル、下部の直径〇・四二メートル——それでも集落や港のはるかかなたまで聞こえたという。<sup>(33)</sup>南イタリアの北寄りにあったベネディクト派修道院聖ヴィンツェンツォ・アル・ヴォルトウルノから出た八世紀の鐘は、その二倍ほどの直径で、修道院は当時恐らくかなり大きな鐘楼を使用していた、と推定されている。<sup>(34)</sup>

このような鐘の調達ないし鑄造にかかわる言及は、すでに九世紀以来、教皇、司教、修道院長などの伝記のなかに、あるいは同じように宗教的起源をもつ文書のなかに散見する。なかには——特記すべきことであるが——すでに“*artifex*”と記し鐘鑄造職人の名前を付して報告されているものもある。この種のものの最も早い証言の一つは、*Liber Pontificalis*(公式の教皇の歴史書)のなかの報告——教皇ステファヌス三(二)世(在位七五二―五七)が、自分が建立したローマの聖ペテロバジリカの塔内に三つの鐘を設置させた、という報告である。このような仕方(35)で聖職者や民衆が礼拝に呼び集められるためであったという。

ヘネガウ地方ロベスの聖ペテロ修道院長フォルクインは、九七五年から九〇年の間に彼が執筆した『院長たちの事績』において院長時代(九六五―七二年)の自身の貢献を述べるくだりで、ダニエルという名前の鑄造職人(“*artifex Daniel*”)に二つのかなり大きな鐘を製造させたことを強調している。その際、院長は二つの鐘の銘文のそれぞれに、寄進者たる自分の名前を目立たせることを忘れていない。鐘(36)というものが重要視されていたことを示唆するものと考えてもよいであろう。

往時卓越した政治勢力であったロンバルディアの都市クレモナの年代記執筆者にとって都市ベルガモとの同盟締結よりも重要であったのは、執政官(37)たちが十一年にわたる在任中の一一九〇年に“*campana grossa de credencia*”とやらに“*schela militum ad egritandum*”を製造させたこと、すなわち、ムーネの最も重要な委員会の大きな鐘と、さらに、それを鳴らして騎馬の市民軍を召集するための鐘を製造させた

ことであつた。<sup>(37)</sup>

このようにして古典古代後期以後のころになって始めて、そしてローマ帝国とは接することのない、ないしもはや接することのなくなったラテン的キリスト教世界の諸地域で、鐘の採用、普及が必要とされる状況が史料的に検証されることとなるのであるが、ここで注目をひくのは、教皇支配下になった——すなわちビザンツの勢力ではなくなつた——ローマで鐘が採用されるのは、八世紀後半、教皇権とカロリング王権の結合以降に属するらしいことである。<sup>(38)</sup>上で言及した教皇ステファヌス三(二)世は、明らかにその最初の歩みを始めたと言えよう。

この時期以来ローマとその周辺では鐘がシマンドロンにとって代わることになる。<sup>(39)</sup>シマンドロンというのはたいてい音を出す木製の器具で音の到達範囲からして主として比較的狭い修道院の共同社会での使用に限られていたものであるが、以後ギリシア正教会内部で、恐らく中世後期にいたるまで、明らかに有力な意志伝達器具であり続けた。<sup>(40)</sup>

ところで鐘がビザンツや古ロシアのさまざまな文化諸領域に現われているところでは、中世後期にいたるまでの限りでは、通常ラテン的キリスト教文化の持続的影響下にあるところだけであることが目につくであろう。かかる影響は、例えばビザンティン帝国では、とりわけでもイタリアの商人たちや遠隔地商業都市の存在という理由だけでも明らかとなる。なかでもヴェネツィアは、周知のように一二〇四年古いビザンツ帝国を排除して半世紀以上にわたっていわゆる「ラテン帝

国」を実現した。このようなところでは、鐘の分布が、他のところ、例えばノヴゴロドなどと同様、多くの場合——仮令しばしば単に初期段階だけで短命に過ぎなかったとしても——共同体的生活形態の発展と平行して現われていた。<sup>(41)</sup>

如上の考察は、イスラム世界における鐘と共同体に関する否定的所見からも確認されるであろう。フランスの法学者J・ボードンはその実情をよく識っており、一五七六年初版の『国家論』*Les six livres de la république*における絶対的で不可分の国家権力に与する意見表明のなかで、政治権力的観点から事実を次のように説明している。“Le grand Seigneur et tous les princes d'Orient” (ここで考えられているのは、第一にコンスタンティノープル＝イスタンブールに居住することになったスルタンとオリエントのすべての君侯たちである)は彼らの勢力領域で鐘を禁止することで統治に成功した。なぜならば、彼らはそうすることで、“en tout l'empire d'occident”——他ならぬ西欧的共同体の郷里である場所で普通であつたような騒乱や蜂起を避け得たからである、と。<sup>(42)</sup>すでに触れたように、ハーヴェルカンプ氏は、ユダヤ人社会における共同体の存在を指摘している。<sup>(43)</sup>早くから発達し宗教的に基礎づけられた共同体をもつこのユダヤ人社会には、しかしながら鐘が欠けているという。とすると、「鐘」の登場する文化圏と「共同体」の文化圏とは重なりあうというハーヴェルカンプ教授のテーゼとは矛盾することになる。この点については、教授は、幾つもの原因があるであろうとしながら、次のような説明を試みている。<sup>(44)</sup>

第一に、中欧のキリスト教世界のなかにユダヤ人の「共同体」<sup>45</sup>“*communias*”の端緒が見られるようになる十世紀には、鐘がとづくにキリスト教の宗教的媒体<sup>メディア</sup>になってしまっていたこと。それは、八世紀以来伝わっている、そして十世紀にローマ・ドイツ風に更新されたベネディクトゥス・フオルメル祝祷儀式書に従って洗礼式に似た祭式で捧げられた。因みにこのやり方は、カトリック教会において今世紀六〇年代の第二ヴァチカン公会議（一九六二―六五）にいたるまでほぼそのままが続いていた。第二に、その後の諸世紀末においても、西ヨーロッパで一定地域に集住する構成員が千人に達するようなユダヤ人の共同体はほとんどなかったこと、である。ところで、にもかかわらず、信徒をシナゴグ<sup>シナゴグ</sup>に呼び集める会堂係<sup>シナゴグ係</sup>のことを、中世後期のキリスト教側の史料では時おり“*campanator*”（すなわち鐘つき<sup>鐘つき</sup>）と記しているという。

ここで都市的集落との関連について一言だけ触れておきたい。都市の死活にもかかわる重要な意志伝達器具としての鐘の意義に言及した最古の史料の一つは——ハーヴェルカンプ氏に拠れば——サンスのルーポの伝記 *Vita des Lupo von Sens* である。この伝記は、九世紀以降に初めて伝わるものであるが、「信頼に価する」ものであり、その記すところに拠れば、後世聖人に別せられることになる該大司教は六一五年、フランス中部のこの司教座聖堂都市サンスにクロタール二世王の軍隊が攻撃してきたとき、聖ステファヌス教会堂の鐘を“*ad evocandum populum*”（民衆を呼び集めるために）打ち鳴らした。それだけのこと<sup>45</sup>によって攻撃軍は意気阻喪し恐怖にかられて逃走した。攻撃軍が勇氣

を失くした最大の理由は、本質的には、司教が遅滞なく鐘を打ち鳴らすことによって都市住民の防衛共同体<sup>ヴェーデルゲマインシャフト</sup>への動員をなし得ていたことであつた。

#### 四

サンスで教会の鐘という伝達手段によって出現した防衛共同体は、当然のことながら、一定の協議と同意に基くものであつたに違いない。このようにその生存にかかわる理由からだけでも——例えばランゴバルド治下イタリアで七世紀以来「教会堂前の会合」<sup>46</sup>“*conventus ante ecclesiam*”というかたちで確認されているような——民衆集会への移行<sup>フォルクスフエアザムルンゲ</sup>という現象が生じるのである。このような教会堂前の集会は、当初は、その教会を中心に配置されている農村的共同社会のための、第一義的には、裁判上の法的諸関係を規制するためのものであつたことが証明されているが、かかる裁判集会や「集会の共同体」<sup>フエアザムルンゲウマインデ</sup>がこのように早い時代から司教座所在地の諸都市でも開催され、裁判上や法的な行為と並んで都市の生活にかかわる他の重要問題の協議も行われたことも明らかであろう<sup>47</sup>。

“*conventus ante ecclesiam*”は、キリスト教会の祭祀の中心点によって特定された宗教共同体<sup>サクラレリギオン・エンタテ</sup>の中心機能を示す表現形式であつた。そしてその宗教共同体は、その地域で効果的に作用する鐘の音によってこの世の生活と彼岸の生活のために、生きている者のためにも死者の魂の救いのためにも一層活潑に機能したのである。死後の魂の救済が現在

とは比較できないぐらい現実的な関心事であった中世の心性を考えれば、特記しておいてよい事実であろう。聖人の祭日の度にその聖人の「来臨」<sup>〔praesentia〕</sup>が想いおこされ表出されるような教区に聖遺物（聖人の遺体、遺骨、遺品など）が厳肅に入場するとき、西方キリスト教世界では、すでに古典古代後期以来キリストのエルサレム入城が模範となっていた。このような仕方では、同時に目に見える地上の都市が聖都エルサレムの具現と考えられたのである。<sup>〔48〕</sup>

ただしこのこと——キリストのエルサレム入城——は、国王の到着「adventus regis」の場合にもあてはまることには留意しておかなければならないであろう。国王の入城は、初期中世以来キリストのエルサレム入城の反映、それどころかそのことの上演として、華やかな鐘の音を響かせながら執りおこなわれたのである。<sup>〔49〕</sup>従ってわれわれの関心は、鐘というものが爾後の歴史的展開のなかで支配の側の道具立てにとりこまれてゆくのか、「共同体」形成の梃子<sup>てこ</sup>という役割をより多く果たすことになるかを追及することになるであろう。

通常の理解では中世の中・後期に属することとなるヨーロッパの都市（と農村）共同体形成と鐘の関係をとくに後者の銘文の分析などを通して考察することは、別稿の課題としたい。この小稿では、さしあたりヴェーバーの理念型的理解をこめた「共同体」は、西および中部ヨーロッパのキリスト教（およびユダヤ人社会）文化圏に特有な現象であって、ギリシヤ正教会——ラテン的西方の影響を受けたところを例外として——やイスラム圏では登場しないこと、そして鐘の使用が

「共同体」成立に先立つ初期の中世に、西ヨーロッパ世界（ユダヤ人社会を除く）により広く普及した。その背景には西方ラテン的教会圏における聖人崇拜のあり方が注目される、とするハーヴェルカンフ氏のテーゼを確認し、西ヨーロッパ世界の「共同体」成立と「鐘」の相関の親和性に注目することで筆を擱きたい。

なお、この「共同体」と「鐘」の関連を通して日本の前近代の「共同体」にも眼を向けた比較を試みたいというのが筆者の関心事であることも付記しておきたいと思う。

## 注

- (1) J. Habermas, *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied 1962, Neuaufl., Frankfurt 1990. ハバマスによれば「……民衆は、その前で支配階層たる貴族、高級聖職者、国王たちが登場しその地位身分を表現する舞台装置である。支配から閉めだされている民衆は、公共を代表するものたちの舞台を構成する諸条件の一つにすぎない」とされる。A. Haverkamp, „... an die große Glocke hängen“ Über Öffentlichkeit im Mittelalter (以下 Haverkamp, Über Öffentlichkeit と略記) in: *Jahrbuch des Historischen Kollegs*, 1995 S. 83 に拠る。

- (2) Habermas, a.a.O., S. 55f. u. 69f.; Haverkamp, a.a.O., S. 83/84 に拠る。

- (3) ヨーロッパ中世都市研究に関する筆者の問題意識については、さし当り筆者の旧稿「ヨーロッパ中世都市史研究の視角について」『山梨大学歴史学論集 14』一九七一年、「ヨーロッパ中世都市像の転換」『アジア文化研究 11（大塚久雄教授古希記念論文特集号）』一九七九年、「ヨーロッパ中世都市史の研究状況」『史潮 新 6』歴史学会一九七九年、Die japanische Stadt im Übergang vom Mittelalter zur Frühenzeit, in: *Berliner Beiträge zur*

sozial- und wirtschaftswissenschaftlichen Japan-Forschung (Occasional papers) 21. Ostasiatisches Institut, Freie Universität Berlin, 1982; Stadt und Bürgertum in der mittelalterlichen Geschichte Japans, in: *Jahrbuch für Geschichte des Feudalismus* 7, Akademische Verlag Berlin, 1983 など参照。

- (4) P. Blicke, Kommunalismus, Parlamentarismus, Republikanismus, in: *Historische Zeitschrift* 242 (1986); Ders., *Deutsche Untertanen — Ein Widerspruch*, München 1981 (服部良久訳『ドイツの臣民 平民・共同体・国家 一三〇〇—一八〇〇年』ワネルヴァ書房一九九〇年) Ders., *Die Revolution von 1525*, 2. Aufl. München / Wien 1981 (前間良彌・田中真造訳『一五二五年の革命 ドイツ農民戦争の社会構造史的研究』刀水書房一九八八年) Ders., *Studien zur geschichtlichen Bedeutung des deutschen Bauernstandes*, Stuttgart 1989, d. Brillckle, 魚住昌良訳「不服従——ドイツの徳目」魚住昌良編著『アジアの封建制』(アジア文化研究別冊一) ICROアジア文化研究所一九九〇年 P. Blicke, Die Reformation im Reich 2. Aufl. Stuttgart, 1991 (田中真造・増本浩子訳『ドイツの宗教改革』教文館一九九一年などを参照。
- (5) A. Haverkamp, „Dem Gemeinwohl diene ich durch mein Tönen“ Ohne Glocken Keine Gemeinde — Kommunale Organisationsformen im Europa des Mittelalters (以下 Haverkamp, *Dem Gemeinwohl...* と略記) in: *Wirtschaft & Wissenschaft* 1995 と前掲注(一)の Ders., Über Öffentlichkeit, 両者ともに著者が一九九五年七月十日「マンヘイム」Historischen Kolleg において „Formen der Information, Kommunikation und Selbstdarstellung in den mittelalterlichen Gemeinden Deutschlands und Italiens“ とする共通テーマのロキウムで発表した報告に基づいている。
- (6) 入間田宣夫「逃散の作法」豊田武博士古稀記念「日本中世の政治と文化」吉川弘文館一九八〇年(後に入間田「百姓申状と起請文の世界 中世民衆の自立と連帯」東大出版会一九八六年に収録)、峰岸純夫「中世社会と一揆」『一揆 4 一揆史入門』東大出版会一九八一年。笹本正治「中世の音・近世の音」名著出版一九九〇年(九頁)を参照。なお近世の鐘を支配権力側の管轄下におかれたものとしてその実態を考察した浦井祥子「江戸府内の『時の鐘』——その成立および管理・運営——」『史冊』36 一九

九五年など若い研究者の関心も寄せられており、鐘と支配や共同体をめぐる研究の進展、拡充が期待される。

- (7) 笹本前掲一〇頁
- (8) 阿部謹也『中世の星の下で』筑摩書房一九八六年 一三〇頁など
- (9) P. Satori, *Das Buch von deutschen Glocken*, Berlin, 1932; E. Lippert, *Glockenläuten als Rechtsbrauch*, Diss. Heidelberg, Freiburg 1939 阿部前掲一三二頁に拠る。
- (10) H. Pirenne, *Les villes du moyen âge. Essai d'histoire économique et sociale*, Bruxelles, 1927 (佐々木克己訳『中世都市——社会経済史的試論』創文社一九七〇年) F. Rönig, *Die europäische Stadt und die Kultur des Bürgertums im Mittelalter*, Göttingen 1964 (魚住昌良・小倉欣一訳『中世ヨーロッパ都市と市民文化』創文社一九七八年) H. Planitz, *Die deutsche Stadt im Mittelalter. Von der Römerzeit bis zu den Zunftkämpfen*, Graz / Köln, 1954; E. Emen, *Frühgeschichte der europäischen Stadt*, 3. Aufl. Bonn 1981; dies. *Die europäische Stadt des Mittelalters*, Göttingen, 3. Aufl. Göttingen 1979 (佐々木克己訳『ヨーロッパの中世都市』岩波書店一九八七年) など。
- (11) Haverkamp, *Dem Gemeinwohl* S. 21
- (12) Ders., aa.O. S. 21f.
- (13) M. Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft. Grundriss der verstehenden Soziologie*, 4. Aufl. 1956 折取の Kapitel IX, Soziologie der Herrschaft, 8. Abschnitt, Die nichtlegitime Herrschaft (Typologie der Städte) (世良晃志郎訳『都市の類型学』創文社一九六四年) など。Haverkamp, *Dem Gemeinwohl* S. 21 に拠る。
- (14) Haverkamp, aa.O., S. 21
- (15) Haverkamp, aa.O., S. 21
- (16) Haverkamp, aa.O., S. 21
- (17) Haverkamp, aa.O., S. 21
- (18) Haverkamp, aa.O., S. 21/22
- (19) Haverkamp, aa.O., S. 22
- (20) Haverkamp, aa.O., S. 22
- (21) P. Brown, *Die Heiligenverehrung. Ihre Entstehung und Funktion in der*

- lateinischen Christenheit, Leipzig 1991 S. 97f. Haverkamp, aa.O., S. 22; Ders., Über Öffentlichkeit, S. 92 に拠る。
- (22) Haverkamp, Dem Gemeinwohl, S. 22
- (23) 初期中世のトリニアについての文献は E. Ewig, *Trier im Merowingereich*, Trier 1954; Ders., Von der Kaiserstadt zur Bischofsstadt, Beobachtungen zur Geschichte von Trier im 5. Jh., in: W. Besch u.a. (Hrsg.), *Die Stadt in der europäischen Geschichte*, Bonn 1972 など。邦語文献では瀬原義生『ヨーロッパ中世都市の起源』第八章 未来社一九九三年、日置雅子「中世初期のトゥリアに関する考古学的定住史的考察——古代から中世への連続的・不連続的局面」『社会経済史学』60・1—一九九四。最新のものでは日置雅子「司教による都市支配権の形成——六世紀から十世紀にかけての司教都市トゥリア——」『愛知県立大学文学部論集 44』一九九五年を示唆してきた。
- (24) Haverkamp, Dem Gemeinwohl S. 22
- (25) Haverkamp, aa.O., S. 22
- (26) Haverkamp, aa.O., S. 22
- (27) Haverkamp, aa.O., S. 22 / 23
- (28) P. Price, *Bells and Man*, Oxford 1983 p. 1ff. Haverkamp, Über Öffentlichkeit S. 81 に拠る。
- (29) 研究状況の概観は H. Leclercq, Cloche, in: *Dictionnaire d'archéologie chrétienne et de liturgie III*, Paris 1948; M. Trunpf-Lyritzaki, Glocke, in: *Reallexikon für Antike und Christentum XI*, Stuttgart 1981; Price, aa.O., 453。Haverkamp, aa.O., S. 81 に拠る。
- (30) アイルランドの修道院についての概観は M. K. Richter, Irland im Mittelalter, Kultur und Geschichte, Berlin 1983; R. Shape, Some Problems Concerning the Organization of the Church in Early Medieval Ireland, in: *Pertita, Journal of the Medieval Academy of Ireland* 3, 1984 453。Haverkamp, aa.O., S. 81 に拠る。
- (31) 六世紀についての典拠は Gregor von Tours, *Historiarum libri decem*, ed. B. Krusch u.R. Buchner (*Ausgew. Quellen z. dt. Gesch. d. M.A.* 3) Darmstadt 1964 VIII, 1, S. 160; Haverkamp, aa.O., S. 81 に拠る。
- (32) Haverkamp, Dem Gemeinwohl, S. 23
- (33) Haverkamp, aa.O., S. 23
- (34) Haverkamp, aa.O., S. 23
- (35) L. Duchesne, *Le Liber Pontificalis. Texte, introduction et commentaire*, 2 Bde. Paris 1966-92 94 c. 47 add. Haverkamp, Über Öffentlichkeit, S. 73 に拠る。
- (36) *Folcuni gesta abbatum Lobienium*, ed. G. H. Pertz, MG SS IV, 71 Haverkamp, aa.O., S. 73 に拠る。
- (37) *Annales Cremenenses*, ed. O. Holder-Egger, M G SS XXXI 8 Haverkamp, aa.O., S. 74 に拠る。
- (38) Haverkamp, Dem Gemeinwohl, S. 23; Ders., Über Öffentlichkeit, S. 81
- (39) S. de Blaauw, *Campagna Supra Urbem. Sull'uso delle campane nella Roma medievale*, in: *Rivista di storia della Chiesa in Italia* 47, 1993, p. 367-69. のアマラルス・フォン・メッツの手紙。彼はコンスタンティノーブルへの旅行(八一三—一四年)のなかでシベンドロンがイリリアやギリシアではまだ使われていないと目をこめづる。A. Cabaniss, *Amalarius of Metz*, Amsterdam 1954, p. 33ff. Haverkamp, aa.O., S. 81 / 82 に拠る。
- (40) E. V. Williams, *The Bells of Russia. History and Terminology*, Princeton / New Jersey 1985. Haverkamp, aa.O., S. 82 に拠る。
- (41) Haverkamp, Dem Gemeinwohl S. 24
- (42) Haverkamp, aa.O., S. 24
- (43) 前述一五頁。
- (44) Haverkamp, aa.O., S. 24
- (45) *Vita Lupi episcopi Senonici*, ed. B. Krusch, MG SS rer. Merov. IV, 179-187; Haverkamp, Über Öffentlichkeit, S. 75 に拠る。
- (46) Haverkamp, Dem Gemeinwohl, S. 24; Ders., Über Öffentlichkeit, S. 76
- (47) Haverkamp, Dem Gemeinwohl, S. 24
- (48) Brown, aa.O., S. 97f. Haverkamp, Über Öffentlichkeit, S. 92 に拠る。
- (49) R. Roy, F. Kobler, *Festaufzug. Festeinzug*, in: *Reallexikon zur deutschen Kunstgeschichte VIII*, München 1987, 1432ff. がフランク国王グントラムのオルレアン入城の史料を Gregor von Tours, aa.O. VIII, 160 から引用してゐる。Haverkamp, aa.O., S. 92 に拠る。